

教員3年目の春に

古磯 祥子

鳥取県立倉吉総合看護専門学校保健助産学科

初心者の想い

親子3人で夕餉の食卓を囲んでいると、電話のベルが鳴りました。「先生、初産婦さんの入院がありました。子宮口○cm、陣痛の状態は……」。実習中の学生からです。私が専任講師として担当している助産学実習では、学生の分娩介助3例目までは、教員が立ち会うことになっています。「いつ帰ってくるの?」と不機嫌そうなわが娘とそれをなだめる夫に見送られ、素早く実習病院へと向かいます。

私が分娩室に入ると、先程の電話の主がいつもとは違う緊張した面持ちで産婦さんの腰をさすっていて、表情が少し和むのが感じられました。いよいよ分娩。学生の分娩介助を見守る私の心拍数も、分娩監視装置から聞こえてくるベビーの心拍数と同じくらいに上昇します。きっと、学生も同じでしょう。やがて分娩室にベビーの元気な産声が響き渡り、産婦さんや家族の感嘆の声、スタッフからの祝福の声が交錯し、心からほっとする瞬間が訪れます。

すべてが無事に終了し、幸せそうな家族と壁一つ隔てた処置室で、介助技術を振り返りながら、労をねぎらう私の言葉に、涙をみせる学生もいます。涙の理由は、極度の緊張から解き放たれた安堵感や、自分が考えていたほど十分な助産技術ができなかった悔しさや、産婦さんへの罪悪感であったりと実にさまざまです。助産婦なら誰しもが覚えのあるように、生まれて初めて分娩介助をする学生は、決して忘れることのない複雑な想いを

経験します。そんな学生の想いを受け止めながら私も、自分が初心者であった頃のことを思い出すのです。

達人といたあの頃

私は病院に就職してすぐ、NICUに配属されました。NICUでの5年間の経験で、ある程度の自信をもって「看護婦」として動けるようになった私は、臨床5年目にして産科病棟へ配置転換され、いよいよ「助産婦」として勤務することになりました。産科チームは、年齢層、キャリアとも幅広いスタッフで編成されており、それぞれのスタッフが個性を発揮して働いていました。

そしてそこには、パトリシア・ベナー博士が『ベナー看護論』(井部俊子他訳、医学書院、1992)で述べているような「達人」と呼べる人がいらっしやいました。達人は助産婦というよりむしろ、重厚な産婆さんの風格をもち、医師からも一目置かれ、スタッフの行動を観察している視線の鋭さと指摘の的確さは、初心者の私にとって脅威でもありました。

達人の言動は、ベナー博士の言う「卓越性」を秘めているため、初心者の私にはすんなりとは理解しがたいものでした。達人の一言に、ひどく落ち込んだり、感情的になり疎ましく感じることもさえました。私のプライドは脆くも崩れ去りました。でも、今になって考えてみると、「お産につくときは、これからこのお産がどうなるかを考えて」「お産に医者は何人もいない」と達人から端的な助言をいただきましたが、そのお言葉はマニ



ュアル化して助産をこなし、予測はおろか常に状況対応型のうえ、医師の範疇にまで介入しミニ医師化していく私を戒めてくれていたのだと理解できます。達人は多くの経験から、助産技術はもちろんのこと、助産診断や助産婦の独自の機能を、自分の中に理論として構築していたのです。

教えるということ

私が自己の看護実践を客観視し、科学的根拠をもたせることの意味を考えるきっかけとなったのは厚生省看護研修研究センターでの1年でした。

それまでの私は、臨床経験も10年を過ぎ、仕事と育児に明け暮れる毎日でした。そんな中で、看護学生時代を過ごした東京で、もう一度学ぶ機会を得られることは、とても魅力的でした。幸いにも周囲の理解と協力を得て、当時2歳の娘と上京し、センターで学べることになりました。

子連れ学生の私は、やはり特異な存在に映ったようで、教官やクラスメートから“パートタイムマザー”と呼ばれ、励まされ支えていただいたように思います。センターで学びながら、同時に2歳から3歳へと成長する娘をみていた(育てたとは言いがたい)私は、教育と子育ての共通項に気づきました。

臨床指導者として実習に携わっていた頃の私は、学生のできていないことが目につき、その指摘ばかりしていたように思います。子育ての時、わが子ができないことはどうすればできるようになるか、親は知恵を絞って考えます。うまくいった時には認め、褒めたり共に喜んだり刺激を与

えます。このポジティブな学びの確かめがないと、子供は本来持っている能力さえ発揮できなくなります。達成感こそが、自らやろうとする次の学習意欲につながります。

反面、あらゆる教授技術を駆使したつもりでも、効果がすぐには見えないのが教育の難しさでもあります。私が達人の教えを理解するのに数年を要したように、親の教えやありがたさに気づくのは、先になるのです。教育は見返りの期待できない、親から子へのいわば“無償の愛”のようなところがあると思っています。

初心者に戻って

私は、2年前より助産婦教員として、再び初心者からのステップを踏み始めました。今どきの若者の心をつかむのは難しく、教育現場の理想と現実とのギャップはなかなか埋まりません。次から次へと新たな課題が山積みで、自分の能力不足を感じることもしばしばです。

この雑誌の出る4月には、いよいよ私も3回目の新入生を迎え、私にいろいろなことを教えてくれる娘も小学校へ入学します。公私共に奮起しなければならぬ1年が始まっていることでしょう。

最後に、私が恩師から送っていただいた信条にしている言葉を紹介します。

「学びて厭わざるは 智なり

教えて倦まざるは 仁なり」

さて、次は同じくママさん研修生としてセンターで共に学び、私のこよなく愛する沖縄の地で教育に携わっている賀数いづみさんです。